

龍谷大 LORC と東京農工大 C O E との合同研究会

日時	9月6日(水) 午後1時半 - 5時
場所	サンハイツホテル名古屋会議所
テーマ	「今後の研究の基本線とテーマの確認」
司会	白石克孝
報告者	白石克孝 「生存科学への社会科学からのアプローチ」 堀尾正鞠 「生存科学と LORC の協力の可能性」
出席者	堀尾正鞠 (東京農工大大学院 教授) 千賀裕太郎 (東京農工大大学院 教授) 福井隆 (東京農工大大学院 客員教授) 白石克孝 (龍谷大学 教授) 広原盛明 (龍谷大学 教授) 辻本乃理子 (大阪健康福祉短期大学 講師) 的場信敬 (博士研究員) 西原京春 (リサーチ・アシスタント)
配布資料	シリーズ「生存学」ブックレット企画書 生存科学への社会科学からのアプローチ

内容

白石 LORC と東京農工大 C O E が、今後、研究会をベースにする形での関係を発展できるかどうか、その可能性をさぐる目的で今日の会議を開催。堀尾先生と私の方から、それぞれ話題を提供し、それを議論する形で、どんな共同研究があるのかを考えていく。

まず、LORC の到達点を紹介する。

- 1 持続可能な地域社会を公共性概念に埋め込む
- 2 そして、それを実現するグッドガバナンスとグッドガバメント
- 3 それらが地域民主主義をどのように深めるのか

次に生存科学と LORC の議論との接合を考えてみる。C O E への問いとして、

- 1 地域の資源、ポテンシャルをどのようにとらえるのか？
- 2 持続可能性の実現へとつながる地域主体型開発を展望できる政策的可能性は？

さらに LORC からの提示として、

例えば雇用といっても経済的側面もあれば、社会的側面がある。技術も社会の中で有用な技術をどのように考えるのかという問いがある。地域における展望を考えるには、経済的に成り立つというだけでなく、社会的なミッションが重要と考える。そこで、これまでの地域成長モデルの転換を図るために、ローカルガバナンスを支える地域公共政策システム&地域公共人材を、生存科学が地域において展開する際に接合できないかと期待している。

そして、両者で考えるべきこととして、

- 1 地域資源の定義（地域のポテンシャルを的確にあらわせる言葉を定義）
- 2 技術の可能性（社会化された適正な技術、地域の中で共有できるものなど）
- 3 マルチパートナーシップを促進する制度枠組み
- 4 社会関係資本を増大させるような政策デザイン

的場 資料の中に、マルチパートナーシップによって担われる地域公共政策システム：グッド・ローカルガバメントとあるが、その箇所はグッドガバナンスのほうがいいのでは？

白石 ゴールはガバナンスだが、まず入り口にはガバメントを作り変えるところから入ることが実際のアプローチになるのではと考えている。

堀尾 LORC の人はシステムを実際に取り組むことにどこまで関心があるのか？

白石 LORC はシステムをデザインするところからはじまったが、いくつかの地域では、実際にシステムをどのように回すかまで議論がすすんでいる。今、社会的認証性をすすめる地域人材開発機構にかかわる研究会をたちあげている。今までは国が認証して資格を付与していたが、それを、地域社会の中ではなしあって、認証し、資格を付与する。その資格を獲得したら、たとえば公務員採用試験やNPOの採用で有利に働くような仕組みをつくることもねらいとしている。

堀尾 民主主義、マルチパートナーシップに長けた制度等をつくった場合には、上手く機能しないといけない。システム設計のような「袋」だけでなく、何を目指してどう進めるのかという「中身」を盛り込むということも必要では？

白石 LORC の構想調書自体は、政策を論じるのではなく、システムはどのようなものが必要かを研究するというものになっている。LORCとしてここまで議論をしてきて、今ようやく、具体的に何にむかってやっていくのかということで、持続可能性の実現性のためにという中身を考え始めた。農工大との議論にたいしても、期待が大きくなっている。

福井 持続可能性をうめこむというのはそのとおりのと思うが、豊かさはどうか？豊かさの概念はまだ、曖昧だが、重要な鍵になっているのでは。若い人の間でも、持続可能性はわかるが、やはり昔にはもどりたくないという視点からの反応が多い。すべてを貨幣化して、尺度としてやってきた社会だが、もっと違う視点、例えば、助け合い、互換などがおおきなウェイトがあるのに、それがないがしろにされてきた。豊かさの概念を変えることで、積極的な未来への議論へとつながるのでは。

白石 持続可能性を拡張して捉える議論がでてきている、豊かさをその持続可能性の拡張の中で捉えるのか、あるいは、持続可能性と並ぶ、もう1本のイメージとして捉えるのか？今後議論が必要と思う。指摘のように豊かさの定義がまだできていない。

堀尾 我々は様々な場所で具体的なことをやっているのだから、我々の欠けているものを埋

めて、うまく機能するようにする方向での共同研究にしてほしい。

福井 和歌山県で、農村企画の仕事をすすめ、一定の評価を受けている。しかし、計画を作るとこまで来たが、どうやって実施するかという時、マルチパートナーシップでやっていくことになる。そのマルチパートナーシップをつくる部分で、皆さんの知恵を拝借させていただき。

白石 共同研究を進めるために適切な地域社会をこれまで一緒にさがしてきた。探すのが困難と判断したならば、どういう共同研究を進めるのかを議論したい。

広原 高島で一緒にやれたらと提案した。しかし、向こうは合併後のリストラや財政的な問題で、できないと言ってきた。

千賀 自分たちに何があり、何をやりたいのか一度きちっとしなければ。具体的な接続としては1つの地域を共通にする、もうひとつは本を書くというのが協働の場となりえますね。お互いに遠慮ではなく、わかり会える状況をつくる必要がある

白石 農工大COEの側からの話題提起を堀尾さんからお願いします。

堀尾 生存科学の到達点として、

- 1 「脱温暖化」課題の明確化
- 2 「地域からの」というアプローチ
- 3 ツールとしてのPEGASUS概念の展開
- 4 価格破壊型分散エネルギー技術
- 5 地域連携

生存科学とLORCの接合として、論じていくべき課題は

- 1 公共政策論の課題認識のアップデート
- 2 国内と国際的比較政策論
- 3 「脱近代化」論
- 4 問題解決にむけての協働、社会への発信
- 5 国際的課題への取り組み

生存科学では、一方で少し抽象的、制度的な議論をしながらも、もう一方で、実際的な技術的研究をすすめることで、工学部の先生もつきあってくれている。

「中身」の話は、我々の方ではある程度まで溜め込んできたので、LORCへのサービスができるとおもう。LORCの方からは、私たちにたいして、例えば、どのようにしたら省庁の縦割りの中でそれに対処していくのかなど、最後の詰めのところ、我々だけではどうにもならないところに力をかけてほしい。今後、小泉後の省庁の動きの中で、どこのイニシアチブで何ができるのか、国政レベル、自治体レベルでもわからないので、われわれを教育していただくことができるのではないか。

白石 農工大ではさまざまな地域で実験プロジェクトをおこなっている。問題を誰に問いかけると、必要な人が変わるのか？議論をどこにもっていけば、うまく回るの

か？LORC の立場からは、そういった政策デザインを含めて提言しないとイケないのではと考える。

例えば、バイオマスにしても、現実に変化をおこさせるような議論をしたい。そのためには、どんな要件が整うとその技術的可能性がマキシマムに実現できるの論じたり、逆にどんな場合には目標には到達できないのかの障害リストを論じたりすることができると思う。

広原 専門分野、知識の違いを乗り越えて、共同研究するには相当の議論が必要ということ、農工大ではダイナミックに展開していてシナリオを作りつつあるのに対して、LORCはそこまでは到達していないこと、が指摘できる。農工大の事業やシナリオに対して、LORCがディスカッションしてコメントをつけるのが現実的にできることではないか。

千賀 今の白石先生の議論はおもしろかった。こういうまとめ方をするのかという意味で参考になる。できれば、お互いに早い段階で議論して、プロセスの中で協働してやっていくのがいい。

堀尾 実際には農工大COEはあと半年だから、あまり時間がない。

千賀 ドキュメントにかんしては集中して、焦点をしぼって議論していくかたちでまとめていかないといけない。

広原 堀尾先生の方で簡単なドラフトを書き、それに関して、我々は、事前に読んで、自分の考えを書いてきた上で議論する。その内容が先生方の琴線にふれればいいのだが。

白石 私もその意見に賛成。堀尾さんの議論をたたき台にして進めるのがいい。それでは、何について議論していくかというを話し合いたい。可能な論点全部に対処はできないので、そちらが出される中で、こちらに合うものを選んでやっていくという方法ではどうか。

千賀 農工大COEの議論の段階で、例えば、NPOをどのような主体としてとらえればいいのかなど、疑問がある。農工大の中では議論しづらいので、そういうことを問いかけさせてもらいたい。

白石 それを実施するような研究会をひらくということではどうか。農工大の案をみて、LORCの中で適任者にはたらきかける。

堀尾 この後、研究会を何回もできないが、最低2回は開きたい。農工大の方には後で来てもらい、京都で先に予行練習を。

白石 ペガサスのデモンストレーションについては、定例研究会とは別にやりましょう。

この後、次回研究会は

10月25日 3時から 龍谷大学のサテライトで（京都駅の近く）開催することに決まった。